

フレッシュトーク

大好きな飯田で、
未来を創る人を
育てたい。塩澤 優夏 (高70回)
東京学芸大学 教職大学院2年

●しおざわ・ゆうか
緑ヶ丘中学校卒業。高校では吹奏楽班でクラリネットを担当。今も複数の団体に演奏している。趣味は読書とカレー屋巡り。路地裏のネパール人がやっているインドカレー屋はおいしい。



私が教師になりたいと思い始めたのは、小学生の頃であつた。誰か先生に憧れたわけではなくて、ただ漠然と。中学生になつてもその夢は変わらず、尊敬する恩師たちにも出会い、より具体的にその夢を追いかけていた。しかし、高校に入つて生活が一変。私の生活は班活中心のものとなり、勉強は二の次、いや三の次。正直、これをお読みななる皆様に顔向けできるものではない(苦笑)。そのため、教師になる夢も現実味がなくなつていった。大学もその当時の自分の興味を優先し、文学部の国文学科を志望した。しかし心のどこかに教師になる夢が捨て

も多い。また、私の所属する学校教育課題サブプログラムでは、いじめや不登校など子どもたちが抱える様々な困難に目を向け、より良い学校の在り方について日々考へている。私は学校図書館が子どもの「居場所」となつていふことに関心を持ち、より良い学校図書館づくりを研究しようとしている。このように現場に立つ前に「教育」そのものについて理論を知り、より深くより多角的に考えることができるのが教職大学院なのである。

大学院で学ぶ一方で、東京都の小学校で家庭科専科として週2回勤務している。5・6年生に自身の生活に目を向け、興味を持つてほしいと願い、身近な事例を挙げ、考へたことを共有しあう授業を心がけている。しかし実際に子どもたちを目の前にするとうまくいかないことも多い。大学院で学んだ理論をどう生かすことができるか、日々研究である。

大学院の授業で架空の指導事例を考える際、いつも飯田を想定してしまう。そして飯田に帰るたびに思う。「私はこの街が好きだ」と。

私はなぜこんなにも飯田が好きなのか。それは、「地域に育ててもらった」という自覚が大いにあるからだ。小学4年生から飯田市の「オーケストラと友に音楽祭」に参加していた。今年15周年となった本イベントに13回も

きれず、教職課程のある大学に進学した。

大学での学びはとても楽しかった。近代文学を中心に文学理論を学び、ジェンダー・フェミニズムなど、社会問題に通じるところまで関心を広げたりした。教職課程の履修も諦めなかった。加えて図書館司書、司書教諭を履修し充実していたが、コロナ禍の制限により心残りも大きかった。その中で教育に携わることの魅力と重大さを感じ、より学びたいと考へ、進学を決意した。

現在の東京学芸大学に進学したのは1年前。昨年は小学校の教員免許を取るためのコースを履修し、無事取得した。免許取得にあたり、大学4年次にせつかく頂いていた長野県教員採用試験の合格を辞退する必要があつた。我ながら大きな決断であつたと思う。1年間で多くの授業を履修せねばならず、かなりハードであつたが、教育実習含めとても楽しく、充実した1年だった。

そして本年度より、「院生」としての生活が始まつた。教職大学院は研究室に配属されて研究の日々……という訳ではなくて、本年度は講義や演習が中心。学部時代と同じく課題に追われる毎日である。しかし学部と大きく違う点は、共に授業を受ける仲間、現職の先生方がいるということだ。理論を学び、現場の実際を聞き、何ができるのか考へる。理想と現実のギャップを感じるこ

参加して
る常連であ
る。ここに
は私を幼い
ころから知
り、楽器や
音楽を教え
てくれた大



班の弾き手として、弦楽器の体験のスタッフとしました(提供:オーケストラの生徒たち) (提供:オーケストラの生徒たち)

人たちがいる。音楽を通した関わりは自分の中で大きなものとなつている。今年はスタッフとしても参加し、飯田の子どもたちと関わつた。このような地域のイベントに運営側として関わるのは私の夢でもあつた。大学進学で飯田を離れた身でも繋がりをなくさないでいられる。この温かい地元が大好きなのである。

私は常に考へる。「人を育てる」とはなにか。お世話になつた恩師たちとの差はなにか。自分に足りないものはなにか。長野県の教師になるまであと1年半、大学院での学びの中で見つけよう。得たものを未来の飯田を創る子どもたちに還元するために。

私は飯田が好きだ。飯田の街が、人が好きだ。そんな大好きな地元で、次の世代を育てたい。